

別子大水害

平成30年11月11日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

1. はじめに

旧別子の小足谷から劇場跡ぐらいまでの登山道にはカラミが散在している。明治32年の別子大水害で濁流が登山道を沈める高さまで水位が上がったことを示している。足谷川を暗渠にしてその上に積み上げていたカラミが、暗渠の崩壊とともに濁流に飲み込まれて流され、水が引くと登山道にカラミが沈澱していた。

283年間の別子銅山史の中で、別子山中での銅生産を断念して、新居浜の平野部に生産拠点を移す契機となった大事件であった。歴史を動かした別子大水害とはどんなものであったかをたどってみる。

2. 記録

明治三十二年諸国災害図会 東陽堂

明治32年

明治32年の全国の火災と水害を臨時刊行している。その中に別子銅山の変災が大きく記載されている。集落ごとの全壊家屋、半壊家屋、流出家屋、死亡、負傷の統計表が貴重である。被害状況、対応、見聞と網羅している。近県状況も記載。

別子銅山変災視察録

江見水蔭

星

明治33年

神戸新聞社の記者がレポートした被害状況である。土石流の濁流が小学校のレベルまで来ていたなど、個別的資料としても読み取れる。

別子山村郷土誌-変災

別子山村

明治45年

原文対応ワード文字で編集した編集本が別子記念図書館にある。

明治32年、別子鉱山水害の危機対応と災害写真 末岡照啓 住友史料官報47号

平成28年

災害発生から復興までの住友の対応を調査し、災害写真から実態を把握し危機対応と教訓を引き出している。

四国防災88話

国土交通省四国地方整備局

平成20年

愛媛県新誌-銅山川流域 村上節太郎

昭和28年

句碑歌碑歴史探訪案内-その2川西地区

平成8年

別子銅山Q&A

曾我幸弘

平成17年

明治大水害の公害的側面を考察する 森賀盾雄 産業文化都市創造論

平成21年

資料を網羅して歴史的教訓を喚起している。

別子の大水害

住友別子病院

住友別子病院百年のあゆみ

平成元年

水害記念碑

ラブ金子ふるさと探訪実行委員会

ラブ金子ふるさと探訪

水害記念碑原文	ふるさと金子を語る会	思い出の金子第2集	
災害の状況	別子山村史		昭和56年
明治32年の大水害と旧別子の終焉	住友別子鉱山史上巻		平成3年

283年の別子銅山史の1ページを記載している。

別子風水害を考える	二ノ宮馨	山村文化8号	平成9年
別子銅山の台風災害	日本の自然災害		平成10年
円通寺小足谷出張所跡・御霊供養墓標調査	曾我・小田・入江・谷口		平成19年
円通寺小足谷出張所跡・御霊供養墓標調査	谷口淑子	益友54-11・12	平成19年
別子銅山住友墓一瑞応寺・御霊供養墓標調査	谷口淑子	益友56-7・8	平成21年
ああ悲惨であつた別子山の水禍	村上八郎	益友7-64・66・67	昭和35年

15・16歳頃に体験した記憶を綴る。

別子水害写真	市制50周年記念写真集	新居浜市	昭和63年
明治32年大風水害の資料について	(県警察史・別子銅山水災詳報・県議事録)		
	史談会	郷土史談84・85号	昭和57年

84号に「別子山村郷土誌」の「変災」が掲載されている。

水害記念碑ほか写真と説明	史談会	郷土史談84号	昭和57年
明治32年大水害遭難者慰霊法要	史談会	郷土史談86号	昭和57年
明治32年大風水害の史料収集を終えて	村尾利夫	郷土史談88号	昭和57年
溺死33霊慰霊法要		郷土史談99号	昭和58年
明治32年水害記録補集	喜代吉栄徳	郷土史談169号	平成元年
別子銅山大水害の記録(神戸新聞記者江見忠功の現地報告書)上・下	史談会	郷土史談99・100号	昭和58年

「星」に掲載の江見水蔭の「別子銅山変災視察録」を掲載している。芥川三平さんが別子銅山記念館に勤務していた時に古書目録を見て、「星」を購入した。原本を別子銅山記念館に寄贈して、コピーを本人が持参した。それらの写しが新居浜市内に出たと考えられる。

銅山時代異聞	正岡慶信	郷土史談171号	平成元年
別子銅山風水害資料収集管見1～10	正岡慶信	郷土史談250～255・257～263号	平成8・9年

252号に「益友」の「ああ悲惨であつた別子山の水禍」が掲載されている。

253号に「別子山村郷土誌」の「変災」が掲載されている。

別子銅山風水害資料収集管見補1～補3	正岡慶信	郷土史談270・279～280号	平成10年
明治32年、水害記録補集	佐野 繁	郷土史談182・183号	平成2年
2004・台風被害に遭った別子銅山史跡	曾我幸弘	新居浜史談355号	平成17年
地藏堂由来之碑	坪井利一郎	碑文採取	

3. 大水害の概要

明治32年(1899)8月28日、台風が別子鉱山を直撃した。

小笠原諸島に発生した台風は、8月27日の夜には沖縄本島付近に現われた。28日午前中は奄美大島付近にある台風の影響で別子では朝から小雨であったが、正午前には大雨になった。午後2時には台風が種子島付近に達し、気圧は898ヘクト・パスカル、南東の風22.8m、降雨量8.91mmであった。午後4時には891ヘクト・パスカルに低下した。別子では烈風のため観測機器が故障して観測不可能となった。台風は午後8時に足摺岬から上陸して、別子では雷鳴を伴い暴風雨となった。別子では午後8時20分から午後9時までに当日の雨量325mm(別子尋常高等小学校観測気象表として午後4時から午後10時までの雨量)のほとんどが集中豪雨となって降り、推定風速33mの暴風雨の中で、山津波となって人命と家屋・財産を飲み込んだ。暗渠も家屋の木材が引っかかって一時ダムとなり、濁流を受け止めたがまもなく一気に崩壊した。午後10時には多度津・岡山県を経て日本海に抜けた。60km/hと大変速度の速い台風であった。(多度津測候所の報告では52km/hを記録)別子では午後11時には雨が上がり、今さっきの暴風雨が嘘のように月が出て照らしていた。別子では513人の人命が奪われた。

国領川筋でも立川の眼鏡橋に流木が引っかかりダムとなって決壊し、54人の人命が奪われた。

4. 別子銅山変災視察録(江見水陸)に見る被災状況(明治33年の星)

小足谷の林学士の籠手田彦三 新居浜の家には家族は無事。山林巡視で別子銅山に登っていた籠手田は、小足谷倶楽部で玉突に興じた後、旅館に帰る途中で行方不明となる。玉突場に残った者は無事。

小足谷の水車場、家屋は流失する。

岡田亥八郎 1日遅れて着任したので被災を免れた。

小足谷の販売課の松村栄松 一家12人は惨死。妹婿の篠原猶吉は村松の令息を家に送り届けていて死亡するが、猶吉の家族は無事。

死亡 志尾貫一、筒井岩太郎、石川喜平、近藤信蔵、脇本金太郎、岡本知二
雇人の佐伯哲 にわかにかが壊れ佐伯哲は即死。夫人と下女だけが生き埋めとなるが救助される。たまたま山口の学校から暑中休暇で帰省中の長男も死亡する。

精算課の札芳枝 宿直をしていて無事だったが、家族は自宅で惨死。

古川八兵衛 長男は役所で死亡する。

支配人の杉浦讓三談 電話線も切れ、鉄道も不通。道も壊れて、道を開いてから米を運ぶ。

下部鉄道 立川入口の給水所から上は線路崩壊で不通。

立川村 戸数280戸中、70戸は流失。人口1012人中、126人死亡。

石ヶ山丈	人家が焼失する。塩見政助、中島ヤエと長女と次男、森田弥吉、渡辺勅次の6人が焼死する。
上部鉄道	線路は破壊される。
沈澱池	破壊される。
鉦夫・岸下峰吉	一家12人中、峰吉だけ横死。
病院に担込まれた男	入院したにも関わらず、家族を案じて帰宅するが激流に落ちて死ぬ。
医師の高原清二郎談	両見谷の家は押し流されたが家族7人は無事。四方から救助を叫ぶ声が聞こえる。2名だけ掘り出す。
病院	無事。
按摩の猪之吉	逃げれなくて死ぬ。
南光院	裏手から崩壊して転覆する。
鉦業所前の張盤の男	流された鉦夫が張盤の支柱につかまったが、手を放して流される。
立川村の会社	田藤本ほかの宿直者は囲碁をしている最中に浸水するが、泳いで逃れる。
大西房吉	子供一人だけが助かる。
芋野の高橋金太郎妻	家族は押し流されて死亡するが、イソは実父と保土野の避病院に居て助かる。
橋梁	崩落前には流されてきた死体が引っかかる。
病院長の藤並忠三郎談	前の家が流される。自宅も浸水してきて出るに不出られず覚悟するも無事。病院に向かうも道路は崩壊。負傷者も死人同然で治療は困難をきたした。
病院副院長の神尾泰之	家族8人が横死する。
立川村の二狂女	春神勇次郎と佐関特吉の妻2人は夫を亡くして気が狂い、岩によって夫の流れ着くのを待つ。
立川村の新婚	夫を流亡する。
立川村の花嫁	城下家の家族9人流亡するに、今治から里帰りしていた花嫁を含む。
立川村の大師堂	大師堂下の通夜堂が流され10人死亡。
立川村の滝本荘太郎	5歳のユキだけが生き残る。
立川村の竹岡俊一	暑中休暇で帰省していた筈三が母のハル子を浸水の中から助ける。
子を差し上げし女	浸水の家の中で子を差し上げていたが、水が引くと子はいなくなっていた。
小足谷で孫の衣	市橋の孫の衣類を掘り出し慟哭する。
岩井谷から帰宅	岩井谷で7人の中で生き残った近藤儀兵衛、加藤常太郎の2人が立川村に帰宅すると家族は溺死し、家もなくなっていた。
見花谷の山林甚太郎	安全な所へ避難している途中で道の破壊箇所親子3人が転落して濁流に死す。

- 赤羽元弥巡查談 目出度町の一心楼料理場まで水が谷から上がってくる。2階へは上の崖から水が落ちて来る。
久門久七巡查は流され、幸い張盤の支柱に引っ掛かり小学校に逃れる。見花谷で埋まった人を掘り出す。
- 第三 開鑿中の第三通洞に閉じ込められた小沢忠兵衛、政岡竜次郎、政田徳太郎、岡崎初次郎、西坂清市の5人は135時間（6日）後に生還する。馬2頭は斃死する。

5. 別子山郷土誌に見る被災状況(明治45年原稿)

- 別子鉱業所 建物の甚しき被害はなかった。わずかに表門内の通路の張盤10坪ほどが墜落する。電話機は不通となる。
- 重任局 住友新座敷は塀が倒れ、柱がゆるみ、屋根は大破する。しかし地形に異常はなかった。番人の家は土砂で倒壊埋没する。大山積神社の拝殿は前に傾き屋根は大破する。
- 目出度町 村役場は階下の出入り口が土持谷の暗渠が土石で塞がれて水位が上がり水没する。屋根は大破損する。
郵便局は表口に土石が侵入する。
村役場の上の商店、郵便局の横の商家は流出する。
- 見花谷 見花谷川と両見谷川の間に見花谷川が分岐して新しい川筋ができる。前溪に1坪大の巨石が落下してきた。道路は破壊される。数百人の負傷者が出る。
- 病院(風呂屋谷) 病室の一部が破損する。
- 第一通洞南口 東延谷川の暗渠が土石で塞がれ、隧道口を逆襲し、事務所や倉庫は浸水する。事務所内での水深は胸の高さまで迫る。坑内にも流入する。東延機械場に3～4尺浸水する。斜坑口から坑内に猛烈に浸水する。
- 高橋製錬所 土砂石木等で暗渠が塞がれて工場は浸水し、土砂石礫なども侵入する。道路橋梁は破壊される。事務所も転倒流出する。焼鉱窯、反射炉の炭材、倉庫、沈澱濾過池等53ヶ所の建物が破壊、埋没、流出する。
- 土木課山林課 木材小庫は膝まで浸水する。黒橋一帯の家にも浸水する。黒橋は墜落する。
- 住友別子小学校 泥水が少し侵入する。屋根と測候所が破損する。
- 小足谷 大豆倉、水車場、奥倉等が浸水大破損する。道路は崩壊する。備員住宅の数戸が流出する。
- 筏津 橋梁は流落する。建物も流出する。駐在所住宅も流出する。下方は地盤潰流し、上方は小谷増水して流下する。坑内にも溪水が浸水する。
- 被害額 製錬課の195,395円95銭を最大に、病院の80円を最小として、
鉱業所の見積損額は、334,904円42銭4厘。

6. ああ悲惨であつた別子山の水禍（村上八郎）に見る被災状況（昭和35年掲載）

【村上八郎の見聞】

- 風呂屋谷 病院下の安藤の家は、石垣が崩れ橋は流失し床まで浸水してきたので病院に避難する。石段を登る途中で家は流れ去る。
高砂光太郎の家もたちまちに消えてしまった。
高原医師外の家2棟と菅一の家も無くなる。
- 目出度町 会計課長の山田清二郎あたりの山内で一番いい道も壊れる。
- 見花谷 6～7階段に60戸くらいあった家も山津波で押し流されて、足谷川を埋めて広場と化した。老若男女が死に、埋められて地獄と化した。
- 小足谷 見花谷に次ぐ被害。小池支配人の家以外は流失して河原と化す。
- 勘場 ほとんど被害はなかったが、電話が不通となる。
- 奥窯 橋が流失する。
- 高橋 暗渠は流壊する。

【被害状況】

第三方面（星加伊太郎談）

- 谷水が岸にあふれ事務所、住宅を押し流した。開鑿中の第三通洞へ土砂が400～500尺押し込んで、坑夫7人と馬2頭が閉じ込められた。
- 角石原付近 第一通洞上の集落で土砂崩れがある。焼鉱窯、上部鉄道に被害が出る。
- 風呂屋谷方面 鴻上、荒井、高砂、名前を忘れた人、増の5軒は、山も道も滝となり地形石が崩れる中で流失した模様。清水湧出の井戸も土砂で埋まる。
人も濁流に飲み込まれる。
- 目出度町方面 10軒程の商家では床上まで土砂が侵入。うどん屋の荒久は流失。人も生き埋め、流亡する。
- 見花谷方面 6階段くらいに60戸くらいあった家も山津波で押し流され、谷も土砂で埋まった。志尾貫一の家族は流没、中本久吉の家族は流亡、神尾寿司の家族は埋没、野間と山口の家は壊滅したが無事救出、総小屋住まいの人は全滅、浅野と伊藤の家のうち数人は奇跡的に助かる。
- 両見谷方面 8軒が押し流されたが、春さん1人が助かる。26人死亡。
- 高橋方面 筒井岩太郎の家の5人と佐々木操の家の2人が流没。暗渠が崩壊する。
- 小足谷方面 酒醤油醸造所倉庫全滅、松村英松、籠手田彦三、佐伯哲、札芳枝、近藤、野口の家屋が被害。ほかにも被害家屋あり。右岸の労働者家屋も被害を受ける。一面河原と化し、生き埋めの人を救助。
- 東延方面 斜坑口を堤で塞ぎ被害はなかった。

7. 諸国災害図会に見る被災状況（明治32年）

見に来ると満山の各集落は旧形をとどめていなかった。見花谷などは人家50戸中2

戸だけ残り埋没する。小足谷も数戸残し埋没する。雨水のため遠く吉野川に押し流されて別子の満山は悲惨の境と化した。道路、鉄道、橋梁等で破壊されなかったものもなく、電信電話も使用不能。新居浜支店と連絡不通の下、勇気ある2人が危険を恐れずに闇夜に道もなくなった中を下山し、未明になってようやく知らせた。(現代文で記述する)

製錬所、事務所、工場	大破損し器械は過半流失する。
第一通洞南口	一旦塞がれたが、すぐに10間余りが開通する。
勘場	無事だったが入り口の橋は落ちる。
南口の運輸課出張所	破損する。
予防工事の沈殿池	跡形もなく埋没する。
用度課出張所、学校、病院、倶楽部2ヶ所	無事。
新座敷	大破する。
筏津工場、小麦畝出張所	非常に破壊される。
上部鉄道、下部鉄道	非常に破壊される。

【被害の概略統計】

字 名	全壊家屋	半壊家屋	流失家屋	死亡	負傷
見花谷	1	4	38	392	75
両見谷	6	4	12	46	6
山 方	6	2	6	7	1
目出度町永久橋	2	3	2	7	1
東 延	0	0	0	1	0
溶鉦炉	1	2	14	27	0
小足谷	11	11	7	58	21
木 方	0	0	0	3	0
南光院	1	0	6	10	1
弟 地	0	0	5	10	0
筏 津	0	0	11	20	1
肉 淵	1	0	0	0	0
小美野	1	0	0	0	0
竹ヶ市	3	0	0	0	0
瓜生乃	2	0	0	0	0
下七番	0	1	0	0	2
中七番	0	0	0	2	0
奥七番	0	1	0	2	0
保七番	0	0	1	0	0
計	25	29	102	584	108

【変災余聞】

森保安課長

まず見花谷・両見谷を視察す。破壊の家屋の多くは足谷川の谷底に埋没する。頭足を異にする死体累々としてそこここに散在している。死体の判明した分は手続きを済ませて遺族に引き渡す。判明しない分は相当の手続きを定めて行う。

このあたりの習慣として火葬を忌み嫌うので親類縁故に説得して承諾を取り付ける。新たに2ヶ所の火葬場を設ける。

土木課の大工50余名で昼夜で棺桶を作る。多数の死体を火葬するので燃料の欠乏の心配があったが、銅山には多くの材料があり問題が生じなかった。

火葬を認めなかった56名については埋葬した。

死体発掘

吉野川の三好警察官内は157名の遺体が漂着する。

見花谷・両見谷の死体は足谷川の谷底に約200名分が埋没見込みで、200人を使って10日間で全員を掘り出すことにする。

第三通洞内の生存者

既に3500～3600尺を掘っていたが、山崩れで通洞口がふさがれた。この工事には25名が従事していた。通洞内に閉じ込められて死んだものと死体探索に50～60人の坑夫を派遣した。5日目に、通洞内からかすかに人の声が聞こえ、生存者を確認する。

助命者は、負夫・西坂清一(26歳)、負夫・岡崎初太郎(29歳)、負夫・政田徳太郎(42歳)、馬丁の小沢忠兵衛(23歳)、政岡龍次(26歳)の5名。

25名中20名は通洞の外にいた。荷馬3頭中1頭も閉じ込められたが湧水で2日目に溺死する。5人は通洞口か流れ込んできた土砂の上に登ったので溺死しなかった。

全家内11名の死亡

販売課長の松村永松が、今度の罹災者の中で最も気の毒であった。本人、妻、長女、次女、長男、三女、次男、三男、四女、実弟、下女の11名が亡くなった。うち死体の発見は3名のみ。

店員の佐伯哲の家族4名は家屋崩壊の下敷きとなるが、妻、長男、下女の3名は棟木の隙間で助かる。

死体の名刺

鉾山医院医師の神尾泰之は、死を免れないと覚悟して、自分の名刺を右の腕に付けてその上を白布で巻いた。真っ先に発見されるが、家族7名がある身でその時の心中はいかにと涙を誘う。

幸運の婦女

金生村の柴垣嬢(19歳)は、腰より下が土砂に埋まっているところを翌朝8時頃に救い出されるが、正午頃まで放置される。住友の役員が見つけて臨時病院の小学校へ運ばれて治療を受ける。

負傷者19名

死亡者に比べ負傷者の少ないのは、災害が急激だったことによる。

軽傷者が100余名あったが、わずかの手当てで完治し、作業に復帰した。臨時病院に収容されているのは19名となった。

米穀・日用品の運搬 上部鉄道、株鉄道は大破損する。今後の復興の見込みは容易ではない。別子銅山には約1570石の白米があったが、多くを流失して翌日には底を尽いた。まずは道路の修復に着手した。

中国地方から調達の白米・日用品は、総開から山根は貨車輸送。山根から端出場までは下部鉄道沿いに200～300名の負夫を使う。端出場から石ヶ山丈までは索道による。石ヶ山丈から角石原までは上部鉄道沿いに200名の負夫を使う。

一時運賃は平素の10倍に高騰したが、その後は2～3倍である。

7. 大水害の記憶

水害記念碑(庄内町・墓地)	明治38年の7回忌に金子村有志建立 国領川の堤防が決壊
水害記念碑(庄内町・地藏堂)	
旭地藏堂碑文(新須賀町)	人骨の埋没あり、昭和34年に町内有志で建立 別紙参照
水害供養塔(立川町・立川仲宿跡)	昭和58年に建立
百年忌の碑文(立川町・立川仲宿跡)	平成10年に建立
別子鉱山遭難流亡者碑(山根町・瑞応寺墓地)	明治34年の3回忌に建立
死者の墓(山根町・瑞応寺墓地)	旧別子・円通寺出張所墓地から下山 志尾貫一ほか
諸精霊有無縁碑(旧別子・円通寺出張所跡)	平成3年に開坑三百年で新たに建立
死者の墓(旧別子・円通寺出張所跡)	近藤信三ほか
金仏(別子山・南光院)	平成3年に制作、一部縁故者が持ち帰る
溺死三十三霊之塔(仁尾町・南墓地)	
関川堤防改築記念碑(土居町藤原・八坂神社)	
別子鉱山大水害写真帳	明治32年に被害撮影 大坂の山田五一軒(武雅)が従者一人連れて撮影 別子鉱業所の委嘱撮影 9月1日～12日 53枚

8. おわりに

「星」に掲載の江見水蔭の「別子銅山変災視察録」、「別子山村郷土誌」の「変災」、「益友」の「ああ悲惨であった別子山の水禍」が、当時の状況がよくわかる資料なのでレジュメに活字化しようと考えながら諸資料を読んでいくと、新居浜郷土史談に再掲されている。清書の必要がなくなった。

被災状況をまとめていくと、描写の記述が多くて被害記録は思ったより少なかった。文字表現の限界を感じた。幸いにも写真撮影されていて「一見は百聞に如かず」の感がある。しかし、写真に写っているのを文字化すると筆力がある。

偶然に明治32年諸国災害絵図を目にする。被害状況統計の概略で数字的に把握できた。さらに鹿児島県、兵庫県、岡山県、徳島県、香川県、高知県、愛媛県の被害状況も知る。

ほぼ毎月旧別子を訪れているが、120年前に土石流で荒涼とした被災地であったことがウソのように春は新緑が芽吹き、夏は青々とした緑が繁茂し、秋は紅葉に彩られている。足谷川は水音を響かせながら谷の水を集めて流れている。雨の日は橋の上から小滝の重なりの豪快さに目を見張るが、カメラの被写体となる。緑の森は持続可能な未来へ向かって確実に回復していると思う。自然の力は人間の力に比べると実に大きい。だからと言って油断はできない。今のありようを歴史から学んでいないと再び被災する恐れがある。

緑に包まれた足谷山ではあるが、裏門の上流の新ルートを進むと爪跡が残っている。右岸は緑泥片岩のすべり面が露出しているし、左岸には土石流が流し残したカラミがある。見花谷が分岐した水筋が残っている。見花谷と両見谷が足谷川に落水箇所で大岩があり、対岸へ渡る大きな飛び石となっている。

見花谷で亡くなった志尾貫一の子孫が毎年瑞応寺の墓を参り、見花谷の現地へも登ってきている。志尾邦夫と知り合って明治32年が現在とつながっている。